

1. しっかり指導案を書くと、必ず変わる。 「子ども理解」「授業力」がアップする

- ・ 子どもの事も、教材の事も、指導の事も、わかっているようで実はわかっていない。いざ書こうと思っても書けないことが多い。だから書くことが大切。すると授業が見えてくる。
- ・ 誰の顔を思い浮かべながら授業を考えているのか？あの子この子の顔をはっきりさせて、自分の学級の指導案をつくる。すると子ども一人ひとりが見えてくる。
- ・ 研究授業は年に1回や2回。その時ぐらいいは、たっぷり時間をかけて詳しく書きたい。

2. 指導案の中心は「展開の部分」より「趣旨の部分」 ～その「趣旨」をどう書くか～

「この子どもたちに、こんな教材を使って、こんな指導をしたい」と1本の筋になる

★児童観では、このクラスをどう理解しているかを書く。「全体的に明るい」「全体的におとなしい」とか「ほとんどの子が運動場に出て遊ぶ」など全体的な様子や「一人ぼっちになってしまう子も何人かいる」というあいまいな表現だけでは、具体的な子どもの姿は見えてこない。全体的な傾向だけではなく、具体的な行動の様子やその子どもを書かなければ、本当の姿はわからない。それでこそ〇年△組の指導案である。どこのクラスでも通用する児童観は、本当はどこのクラスでも通用しないのである。

気になる子を書くことによって「この授業をどうしたいのか」がわかってくる。その子を見ようとするから、そのまわりが見えてくるのである。個に向けることによってこそ全体が見えてくるのである。実は、全体を見るということは誰も見ないということなのである。

※ 児童の様子は詳しく書かれているが、その実態と授業の関連がないのではダメ。国語の指導案に、国語の授業とは関係ない実態がいくら書かれていてもだめなのである。

★教材観では、単にその教材の説明をするのではなく、この教材とクラスの子どもがどう関わることができるのかを書くのである。この教材の内容はこうこうであるが、このクラスのあの子どもが、この教材を使うことによって、こんな心の揺れが起こるであろうということが書かれているかである。「この教材はこんな点で子どもを生かす、だからこの教材を使っている」というのが教材観である。

★指導観では、この子どもたちをこの教材で、「どう指導するか」を具体的な手立てを含めて書いていく。特に児童観で書かれてあった「気になるあの子」をどういう手立てで心を揺らすのかをはっきり書いてあることが大切である。「この場面では子どもたちに意見を言わせたい」と書いてあっても、その「言わせる手だて」が書かれていないと、実際はうまく言わせることは出来ない。結果的にうまくいくかいかないかはともかく、自分が授業でこうするという具体的な指導の手だてを書くことが大切である。

（付録）

3. 座席表（個人カルテ）を書くと子どもの理解がより深まり、授業に生きてくる

- ・ 座席表とは教室の座席配置ではなく、授業に関する一人ひとりの様子を書き出したもの。
授業は子どもから始まるのである。授業は子どもから生まれるのである